第119号
（創刊：1994年12月15日）

Hirosaki University Hospital Bulletin　弘前大学医学部附属病院広報

南塘（なんとう）だより

発行：弘大病院広報委員会
（委員長：田坂　定智副病院長）
〒036-8563　弘前市本町５３
TEL：0172-33-5111（代表）
FAX：0172-39-5189
https://www.med.hirosaki-u.ac.jp/hospital/

※南塘とは，弘前市史によると医学部敷地内にあった南溜池のことをいう。

2025年（令和7年）10月31日

コーヒーが香り、絵画のある病院、そしてゆったりと受診できる病院へ

弘前大学医学部
附属病院長　袴田　健一

令和７年８月29日夕刻，事務部門有志の企画による「弘大病院カフェ＆コーヒー講習会」が開催されました。美味しいアイスコーヒーとスイーツに，職員もほっと一息。緊張度の高い業務の合間の素敵なプレゼントでした。

また，８月には，青森市在住の画家 張山田鶴子さんから，金魚ねぷたの制作風景を描いた油絵を寄贈いただきました。第30回日展入選作品です。外来棟１階に掲示されています。弘前の夏の風景を切り取った素敵な絵画で，患者さんのみならず病院を訪れる人々を癒してくれるものと思います。最近，「津軽塗りのピアノ」や「凧絵」も寄贈いただきましたが，本院が地域社会の皆様に信頼いただき，親しまれていることを強く感じています。

さて，現在，当院は相互に関連する２つの課題に直面しています。一つは「駐車場の混雑」。午前中早期に外来患者が集中するため，曜日によっては駐車場に入れない自家用車が病院前から遠く親方町方面まで列をなし，交通渋滞を引き起こす事態となっています。駐車場が混雑するため，あるいは採血検査等のため予約時間に関わらず午前中早期に受診する，そのため混雑が助長される，といった悪循環を生じています。診療可能以上の患者数を予約枠に詰め込む運用例なども混雑の一因です。ただ，毎朝，病院長室から外来駐車場を眺めていますと，どんなに混雑した日でも11時過ぎには入庫待ちは解消されますので，外来受診者数と診療時間帯の適正化によって，午前中早期の駐車場の混雑は改善されるものと見込んでいます。

もう一つの課題は「逆紹介率の低下」です。本院は，国立大学病院の中でトップ５に入るほど１床当たりの外来患者数が増加しています。新規患者数の増加は病院の機能上望ましいことですが，症状の安定化した患者を他医療機関に逆紹介しなければ，外来患者数は増加する一方です。限られた医療資源の外来診療への投入比率が高まり，入院診療を中心とする本来の特定機能病院機能の維持も困難となります。また，逆紹介率が現在の33‰から30‰を下回りますと，診療報酬の初再診料が約26%減算され，病院経営にも大きな痛手となります。外来患者数の抑制は，外来混雑や駐車場混雑の緩和の観点からも必要です。

現在，これらの課題を克服するため，外来診療の午後への分散化，外来診療予約の適正化，事前採血の推進，逆紹介の推進に向けた協力を各診療科にお願いしています。また，新たな外来駐車場の確保や患者への採血時間帯協力・逆紹介協力要請など，病院全体での取り組みも進めています。豪雪だった前回の冬には，病院前の朝一の交通渋滞のために地域社会にご迷惑をかけてしまいましたが，雪が本格化する前にこれらの課題解決を目指したいと思います。

各診療科等の紹介　【光学医療診療部】

より安全で負担の少ない内視鏡診療を目指して
～光学医療診療部の新たな取り組み ～

光学医療診療部は令和５年７月18日より新しい入院棟東へ移転し，消化器内科及び呼吸器内科の医師に加え，臨床工学技士，放射線部や看護師を含むコメディカルスタッフ，医師事務，洗浄担当職員が一つのチームとなって，内視鏡による診療および治療にあたっています。

・高度化する内視鏡検査と増える負担

近年，内視鏡機器や技術の進歩により，治療内視鏡だけでなく，組織診断や遺伝子パネル検査を目的とした超音波内視鏡下生検（年間約100件），消化管機能異常の診断を行う内圧測定検査（約40件）など，時間を要する検査・手技が増えています。こうした中で，検査時の苦痛を軽減するために鎮静下で内視鏡を行うニーズが高まっています。また，超高齢化社会を迎えている青森県では，多数の基礎疾患を有する高齢患者の検査件数も増加しています。そのため，鎮静前評価を十分に行ったうえで，基礎疾患を考慮した適切な鎮静薬を選択することが重要です。鎮静中は患者の意識レベル，呼吸動態，循環動態を適切にモニタリングし，検査終了後の覚醒まで安全に管理する必要があります。当部門で，最近導入した鎮静下内視鏡検査について紹介します。

・新しい鎮静薬「アネレム」の導入

これまで主に使用されてきたベンゾジアゼピン系薬剤は，保険適用外であったことから費用負担や拮抗薬の使用といった課題がありました。令和７年８月には，超短時間型ベンゾジアゼピン系薬剤アネレムが「内視鏡診療時の鎮静」に適応拡大され，当部門でも９月１日より導入しています。これまでに14名の患者に使用し，拮抗薬を使用しなくても，従来薬と比較して覚醒後の再鎮静やふらつきの出現がなく，患者・医療者双方にとってより安全で快適な鎮静内視鏡検査となっています。今後，さらなる使用拡大が期待されます。

・プロポフォールによる満足度の高い鎮静

さらに，令和７年７月からは消化器内視鏡検査時の鎮静薬としてプロポフォール（ディプリバン）も導入しました。通常はベンゾジアゼピン系薬剤が用いられますが，大酒家や腎機能低下症例では投与量の調整が難しい場合があります。プロポフォールは半減期が短く，検査後の覚醒が速やかであることが特徴です。内視鏡診療における鎮静ガイドラインでも，リスクの低い症例であれば気道確保の訓練を受けた医療者による使用が可能とされています。当科では，麻酔科の助言を受けながら，ビデオ喉頭鏡や声門上器具などの気道確保器具の整備，鎮静リスク評価チェックリストおよびカプノモニターの導入を行いました。これまでに数例で使用していますが，重篤な鎮静合併症は認められず，スムーズな検査施行が可能となっています。

・呼吸器内視鏡における静脈鎮静を導入

呼吸器内視鏡検査では，令和５年より全例で静脈鎮静を導入し，患者さんの苦痛軽減に努めています。導入にあたっては，オピオイドの準備やリカバリー体制の整備など，内視鏡部・外来・病棟の看護師をはじめとする多くのスタッフの協力により，安全な運用を実現しました。導入前は検査に対する負担を訴える声もありましたが，現在では「知らないうちに終わっていた」との感想をいただくことも多くなっています。さらに，東北地方で初めて凍結生検を導入するなど，新しい技術にも積極的に取り組み，より正確な診断と治療方針の決定に貢献しています。

・最後に

光学医療診療部では，患者さんが安心して検査・治療を受けられる環境の整備を最優先に，安全性と快適性の両立を目指して日々取り組んでいます。一方で，より専門性の高いメディカルスタッフの確保や，気道確保を含む継続的なトレーニング体制の強化，さらには侵襲性の高い治療を手術室外で全身麻酔下に安全に実施するための体制整備など，今後解決すべき課題も残されています。これらの課題に対し，最新の薬剤や医療機器の導入，安全管理体制の充実，そして医師・看護師・技師・事務職員が連携したチーム医療を推進することで，より質の高い内視鏡診療の提供を目指しています。今後も「患者様にやさしい内視鏡診療」を理念とし，患者・医療スタッフ双方にとって安全で満足度の高い医療の実現に努めてまいります。

（光学医療診療部長　櫻庭裕丈）

大学表彰を受賞して

このたび、当院「脳卒中・心臓病等総合支援センター」の活動が高く評価され、大学表彰を賜りました。これまで支えていただきました多くの皆様に、心より感謝申し上げます。

当センターは、令和５年８月、厚生労働省のモデル事業として開設されました。「脳卒中・循環器病対策基本法」に基づき、青森県と連携しながら、誰もが安心して医療を受けられる体制構築を目指しています。医師・看護師・社会福祉士・理学療法士・薬剤師・管理栄養士など、多職種から構成される約 60 名の協力員が参画し、チーム一丸となって活動しています。活動の柱は、①循環器病の患者・家族からの相談支援、②循環器病の疾患啓発、③医療従事者間の連携構築・強化の３つです。開設から令和７年３月末までの総相談件数は 966 件で、そのうち当院以外からの相談件数は 347 件であり、県内全域から寄せられています。相談は無料で実施しており、疾病情報の提供だけではなく、両立支援や心理サポートなど、循環器病に関する様々な不安や疑問に寄り添っています。また、県民向け公開講座や医療従事者研修会を多数開催し、現地参加に加えてオンライン配信を行うことで、地域を越えた学びと連携を育んでいます。

この受賞は、センターに関わる全ての職員、県内医療機関、そして地域の皆様とともに積み重ねてきた協働の成果です。今後も、脳卒中・心臓病の予防から治療、そして社会復帰に至るまで、青森県全体で切れ目のない支援体制を確立し、「循環器病の年齢調整死亡率の減少」ならびに「健康寿命の延伸」に向けた活動に取り組んでまいります。引き続き、ご支援賜りますようよろしくお願い申し上げます。

（青森県・弘前大学医学部附属病院
脳卒中・心臓病等総合支援センター長
富田泰史）

先憂後楽

聞こえる音とデジタル化

病院長補佐　松坂方士

私が研修医を終えて弘前大学医学部附属病院に戻ってきた頃，医療従事者の動線は今とずいぶん異なりました。そもそも，カルテが紙でした。医師は胸ポケットに多色ボールペンをさし，回診が終わると一斉にカルテをひらいて記事を記載しました。ナースステーションでは，看護師が動き回る音の他に，ペン先が紙を擦るカリカリという音とボールペンの色を替えるカチッという音がしていました。採血検査のオーダーは医療情報端末で入力していましたが，CTの予約は放射線部に電話していました。そのため，記事記載後にはカタカタとキーボードを叩く音と受話器に向かって話す声が聞こえました。

今，ナースステーションではどんな音がしていますか？この二十数年で院内PHSが出現しましたので，あちこちで着信音が鳴っています。メモを書き終えてボールペンのペン先を収納する時のカチッという音はまだ残っています。でも，この十年ほどで情報伝達や情報保存が急激にデジタル化され，CTの予約をはじめとして多くの作業が医療情報端末から実施できるようになったので，音はかなり変わりました。

ただし，これはデジタル化であってデジタルトランスフォーメーション（DX）ではありません。デジタル化は情報伝達や情報処理を効率化することは事実ですが，記録の作成者や作成時間が厳密に保存されるので，かえって業務量が増加する場合もあります。DXとは業務の効率化のための電子化のことで，単純に紙情報を電子化することではありません。また，効率化とは変化を意味しますので，業務内容が変化しないDXは存在しません。

これまで慣れ親しんできた業務内容が変化することに不安を感じる人は多いと思います。そのために，何年前に何の目的で開始されたかの分からない業務をずっと継続している部署があるかもしれません。これからは業務内容の一つ一つを見直し，変化を恐れずに効率化を目指す姿勢が望まれていると思います。

令和６年度 ベストやまびこ賞，Good Approach賞，Good Job賞 表彰式を開催

令和６年度ベストやまびこ賞，Good Approach賞，Good Job賞の表彰式を令和７年７月30日に執り行いました。

ベストやまびこ賞とは患者さんからの投書のうち感謝の投書が多い部署を表彰するもので，整形外科，第二病棟７階，病院施設室の３部署を表彰，Good Approach賞とはインシデント報告のうちレベル０の報告が多い部署を表彰するもので，小児科，第二病棟６階，放射線部の３部署を表彰しました。

また，Good Job賞では医療行為が行われる前に患者さんとのコミュニケーション等により医療事故を未然に防いだ個人を表彰するもので，第二病棟４階 山谷看護師（同じ効果の薬剤が内服処方箋と注射指示箋の両方にオーダーされていたことを発見し，医師に確認したことで薬剤の過剰投与を防止できた事例），第二病棟４階 葛西看護師（配薬前の薬剤確認の際に，薬剤の分量誤りを発見し過剰投与を防止できた事例），第二病棟４階（元第二病棟８階）佐藤看護師（抗がん剤の服用スケジュールを理解していたことで，必要な抗がん剤がセットされていないことに気付き無投薬を防止できた事例），第二病棟６階 加藤看護師（化学療法に伴い吸入が必要な患者について，吸入のオーダー誤りに気づき誤投与を防止できた事例），入院棟東７階 成田看護師（医師の指示量と異なる容量の薬剤が届いていたことを発見し，処方のし直しを依頼して適切に与薬ができた事例），放射線部 台丸谷診療放射線技師（同姓同名の別の患者が検査に案内されてきたことに気づき，患者間違いを防止できた事例）の６名を表彰しました。

受賞された部署及び個人には袴田病院長から表彰状と副賞が贈呈されました。袴田病院長からは，本院は昭和20年に青森医学専門学校の附属病院としてスタートして今年で80周年を迎えるが，その間には大きな事故も無く，地域の皆さんに信頼され続けているということはこれまでの医療者一人ひとりが安心・安全な医療を提供し続けてきたことの成果であり，受賞された皆さんにはこの安心・安全の輪を病院全体に拡大していってもらいたいと，激励をいただきました。（医事課）

弘前地区消防事務組合「日勤救急隊 高規格救急車 配備報告式」に参加

令和７年８月18日（月）に弘前地区消防事務組合において「日勤救急隊 高規格救急車 配備報告式」が執り行われました。この報告式には，当院から袴田病院長および花田高度救命救急センター長が参加しました。これは，両機関が令和６年７月に締結した大規模災害等における連携協定を契機に，弘前地区消防事務組合が進めてきた最新式高規格救急車の導入を記念するものです。

この高規格救急車は，平時には日勤救急隊が運用します。これにより，増加する救急要請に日勤救急隊を増隊することにより救命率向上を図ること，また，日中のみの救急隊を運用することにより職員の働き方の選択肢拡充が見込まれます。一方で，災害時には，能登半島地震でのDMAT派遣時に直面した移動に関する様々な課題を踏まえ，弘前大学医学部附属病院のDMAT隊とともに災害医療活動に充てられます。

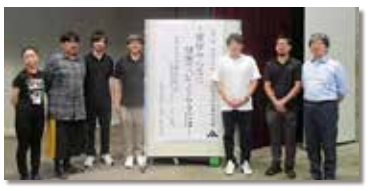
式典で，櫻田市長（弘前地区消防事務組合管理者）から，「弘前大学医学部附属病院との連携を深化させ，救急体制のさらなる充実強化を進めていきたい」旨のご挨拶があり，引き続き，袴田病院長より，「これまで培ってきた協力関係や信頼関係をさらに深め，地域医療並びに災害医療に貢献していきたい」と挨拶がありました。

今回の配備により，両機関が平時からの共同訓練・研修を通じて連携を深め，地域の救急・災害医療体制を底上げする新たな一歩となることが期待されます。（医事課）

青森県感染対策協議会（AICON）市民公開講座を開催

AICON市民公開講座は弘前市において当センターが中心となり，毎年開催しています。今年は令和７年８月30日（土），弘前市民文化交流館ホールにて開催しました。

テーマは「～家族みんなに健康でいてもらうには～」で，リハビリテーション部の理学療法士 前田和志先生による講演と演習が行われました。さらに「家族の感染を防ぐ第一歩～手洗いと咳エチケット～」をテーマに，当センターの尾崎浩美看護師が講演と演習を担当しました。前田先生の講演と演習では，突然移動に介助が必要となった方への支援方法について，一人介助および二人介助による対応の仕方を講演と実演で紹介し，その後，参加者にも実際に体験していただきました。また，青森県における運動不足の現状にも触れ，セラバンドを用いた手軽に取り組める運動が紹介されました。尾崎看護師による講演と演習では，正しい手指消毒の方法についての解説と実演を行い，参加者にも実際に取り組んでいただきました。今回の公開講座は，参加型の演習を多く取り入れたことで，終始飽きのこない内容となりました。



アンケートからは，手洗いや運動など日常生活に直結する知識・技術を実践的に学べた点が高く評価されました。講義と実技を組み合わせた体験型の形式が，理解や記憶の定着に効果的であったと感じられており，全体として満足度の高い内容であったと考えられます。今後も定期的な開催を望む意見が多く寄せられており，引き続き参加型のAICON市民公開講座を企画・開催していきたいと考えています。

（感染制御センター長　齋藤紀先）

小児ねぷた運行

津軽地方の伝統行事である「弘前ねぷたまつり」が，令和７年８月１日から７日間にわたり開催されました。弘前大学は，８月１日の合同運行に出陣し，昭和39年の初参加以来，今回で59回目の出陣となりました。

合同運行開始前には，附属病院正面駐車場において，小児科に入院中の子どもたちや保護者，医師，看護師，事務職員らによる「小型ねぷた」が運行されました。本学のはやしサークル「弘大囃子組」等による太鼓と笛の音にあわせて，子どもたちは「ヤーヤドー」と元気な掛け声を響かせ，津軽の短い夏の夜を楽しんでいました。

合同運行には，学生，留学生，役員，教職員など多くの関係者が参加し，弘前の街を練り歩き，大いに盛り上がりました。（総務課）

絵画寄贈及び設置のお知らせ

このたび，当院に対し，張山田鶴子様より絵画をご寄贈いただきました。本作品を院内の一角に設置いたしましたので，下記のとおりご案内申し上げます。

寄 贈 者：張山田鶴子様
作 品 名：「ねぶたの頃」（第30回日展入選作品）
作 家 名：張山田鶴子（日展会友・洋画）
設置場所：外来診療棟１階　電話コーナー向かい

張山氏は，青森県旧平舘村（現・外ヶ浜町）にお生まれになり，弘前市出身の洋画家 奈良岡正夫画伯に師事し，家族愛や郷愁などをテーマに創作活動を続けてこられました。自身は養護教員としてもお勤めになり，教育と芸術の両面で社会に貢献されました。また，張山氏は日展会員としてご活躍なさり，地域文化と人間愛を描き続ける画家として，青森県内外で高く評価されております。

今回ご寄贈いただいた100号の大作「ねぶたの頃」は，短い津軽の夏を彩るねぶた祭に向けて金魚ねぶたを制作する一コマを色彩鮮やかに描き出した作品で，来院される皆様や職員の皆様に懐かしさと安らぎをもたらしてくれる作品となっております。お近くにお越しの際は，ぜひご鑑賞いただき，芸術のひとときをお楽しみください。

改めまして，張山田鶴子様のご厚意に職員一同深く感謝申し上げます。

今後とも，院内環境の充実に向けてご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

（経理調達課）

院内に笑顔を届けてくれたリンゴミュージック様に感謝状を贈呈

地元の音楽事務所である有限会社リンゴミュージック様は，これまで折に触れて本院を支援してくださいました。

令和５年５月，新型コロナウイルス感染症が５類感染症に移行したことに合わせて，袴田病院長から院内で働くスタッフ等に対して感謝の意を伝える「感謝の夕べ」が開催されましたが，その際にはリンゴミュージック様のご厚意により所属ボーカルグループのライスボールによるミニライブが開催されました。ライスボールの３人の明るい歌声に誘われるように，スタッフ等には笑顔が広がりました。

今年３月には，所属ダンス＆ボーカルユニットであるりんご娘の４人が小児医療センターを訪問し，入院中の子どもたちのベッドサイドを訪れ，子どもたち一人ひとりと交流しながらプレゼントを手渡しするなど，勇気と元気を分けてくれました。

また，５月には入院患者さんを励まし病院職員には感謝の気持ちを伝えたいというお申し出をいただき，ライスボールと音楽プロデューサー・作詞家・作曲家・シンガーソングライターであり多くの有名曲を手掛ける多田慎也氏をお迎えして院内コンサートを開催しました。明るい歌声とパフォーマンスは会場に訪れた多くの入院患者さんとスタッフの心を癒してくれました。

このように，リンゴミュージック様は継続して本院を支援してくださり，入院患者さんやスタッフを励まし，明るく前向きな気持ちにしてくれました。

このたび，これまでのリンゴミュージック様の活動に感謝の気持ちを込めて，代表取締役 樋川様に感謝状を贈呈しました。袴田病院長からは，医療の現場に希望を届けてくれたことに感謝申し上げますと御礼の言葉が贈られました。（医事課）

弘前大学医学部附属病院へのご寄附，心より御礼申し上げます

お名前の掲載をご承諾いただいた方に限り，ここにご芳名を掲載させていただきます。

今号では，令和７年５月から令和７年７月末までの間にご入金を確認させていただきました方を公表させていただきます。（経理調達課）

【診療科等　寄附者ご芳名】
○渡邉　広二　様　　匿名希望　　４名
【さくら基金　寄附者ご芳名】
○鈴木　啓修　様　　匿名希望　　２名

※掲載の同意をいただいた方以外は，匿名希望とさせていただきました。

【 編集後記 】

南塘だより119号をお届けします。ご多忙のところ，原稿をお寄せいただきました皆さまに心より感謝申し上げます。また，表彰関連の記事もお寄せいただき，受賞された皆さま，おめでとうございます。

さて，秋の気配に加え，朝夕には少し寒さを感じる頃となりました。これから紅葉の季節を迎える弘前では，「弘前城菊と紅葉まつり」が開催され，公園内の紅葉を楽しみつつ本丸から臨む岩木山は格別です。鮮やかな色づきに心癒されるひとときは，日々の疲れを和らげてくれることでしょう。また，りんごや梨，栗に加え，今年は豊漁のサンマも食卓を彩り，秋の恵みを楽しむ喜びが一層広がります。皆さまが秋の風情と実りを満喫しつつ，これから猛威を振るうインフルエンザに負けないよう，体調に気を配りながら健やかにお過ごしになれますよう心より願っております。（病院広報委員会委員　看護部　境　美穂子）